
自殺学級

かたな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺学級

【Nコード】

N0148A

【作者名】

かたな

【あらすじ】

退屈な日常に飽き飽きしている卓也は、ある日同じ学校の生徒の自殺を知る。そしてその生徒に共感した卓也は非日常へとまっぴく…

第1話

・卓也はいい加減うんざりしていた。

いつもと同じように学校に行きいつもと同じ授業を受ける。

そんな毎日に飽き飽きしていた。

何か刺激的なことがおきないか、いつその世界など滅んでしまえばいいのに、そんなことさえ考えていた。

「帰ろーぜ、卓也」

聞き慣れた声がして、教室の入り口に目をやるとそこに友人の明雄がたっていた。

卓也と明雄は違うクラスではあるが幼なじみで幼稚園からの付き合いだった。

卓也は小さく頷くと教室を後にした。

帰り道で卓也と明雄はとりとめのない話をしていた。

そうしているうちにふと昼間の思いが頭をよぎった。

卓也は明雄もまた自分と同じ考えなのか知りたくなった。

そこでずばりきいてみることにした。

「なあ、最近おもしろいことないよな？」

返ってきたのは意外な答えだった。

「そんなこともないけどな。結構楽しいよ毎日」

卓也は驚いた。同調してくれるのではと少しばかり期待していたのに。

「そっかー。それなら別にいいんだけど」

「卓也はなんかつまらないことあるの？」

明雄の返事に一瞬本心を答えそうになったが平静をよそおって言う

た。

「いや別になんでもないよ」

「そお。じゃあ俺こつちだから、また明日な」

明雄と別れ一人家路に着く卓也。「俺は独りぼつちなのかな…」

卓也は自分と同じ考えを持っている人がたくさんいると思っていた。しかし、明雄との会話でその考えを改めた。

「ただいま」

返事はない。

この時間は母も外出しており一人である。

家に着くとやることもなく部屋のベッドに寝転んだ。

第2話

どれくらいたっただろう。

あたりはすっかり暗くなっていた。

寝ていたことに気付いた卓也は体を起こし、部屋から出た。
それと同時に母の声がした。

「卓也、これちょっと見てよ」

「なんだよ」

「いいから見てよ、これあんたの学校でしょ」

母の指すテレビからはニュースが流れていた。

『今日午後七時頃、県立東高校屋上から飛び降り自殺がありました
…』

卓也は一瞬耳を疑った。しかしさらに驚くべきことが卓也を襲った。

『…亡くなった生徒は、佐伯静江さんとみられており…』

佐伯静江は卓也と同じクラスの生徒だった。

頭もよく美人であったので学校中の憧れの的であった。

そんな佐伯が自殺した。卓也の頭は混乱していた。なにがあったんだろう？ 考えても考えても答えなどなかった。

テレビでは佐伯の遺書の話をしていた。それによると、

（退屈な世界にさようなら。一緒にいこうね）

と書かれていたらしい。

これを見て卓也の体に衝撃が走った。

佐伯は自分と同じ考えを持っていた。

佐伯に少し憧れていた卓也は彼女に近づけた気がしたまらなく興奮した。

それと同時にもっと近づきたい衝動に駆られた。

佐伯は自分が思いもしなかった方法でこのつまらない日常を抜け出した。

ならば自分がとる手段も一つしかない。そう考えた卓也はふと、遺書の最後のフレーズが気になった。

一緒にいこうね。このフレーズは？

しかし、すぐに卓也の頭の中に答えが浮かんだ。

「これは俺を誘ってるんだ！」

つい喜びのあまり声がでた。佐伯静江は俺を誘っている。卓也は一段と彼女に近づけた気がした。

第三話

外はもう明るくなっていた。

夜が明けても興奮は収まらなかった。

卓也は一晩中、佐伯静江のことを考えていた。まるで夢の中にいるようだった。

「卓也、朝ご飯よ」

卓也はその母の声で一気に現実に戻されてしまった。少し興奮めしながら階段を降りそのまま朝食の席についた。

「今日、学校あるの？あんなことの後なのに」

「朝に説明かなんかするんじゃない？」

卓也は食事を済ませると急いで支度をし、学校へ向かった。案の定、通学路では昨日の事件で持ちきりだった。みんなが噂をしている。

卓也は自分だけが佐伯のことを知っていると思い込み、優越感に浸っていた。

「卓也おはよー。見たよな？昨日のニュース。今朝もすごかったぜ、カメラとか来てないかな？」

明雄が興奮気味にまくしたててきた。

卓也は笑みがこぼれるのを押さえて平静を装った。

「見たよ。すごいな」

「何で自殺なんかしたのかね？俺には全然わからないよ」

卓也は、それはお前なんかにはわからないだろうと思い、そんなことも解らない明雄に軽い軽蔑さえ覚えた。

そして、つい言ってしまった。

「俺はよく解るよ」

「嘘だろ？お前おかしいんじゃないの？」

卓也は明雄のこの返事にカツとなってしまうた。

「お前は死にたいって思ったことないのかよ！？」

卓也の強い口調に、明雄はたじろいで話題をかえようと必死になった。

そんな明雄を見て、卓也も我に返り明雄と他愛もない話をしているうちに学校へと着いた。学校では朝から全校生徒を集めて、校長が説明を行っていた。

故人の冥福を祈り、教室へ戻ると卓也の周りの生徒が急に避けるようになっていた。

朝の明雄とのやりとりを同じクラスの生徒に見られていたのであるらしかった。

卓也は元来そういうことを気にするたちではなかったが噂はすぐに学校中に広まった。

死にたがりの卓也として見られるようになった。

第4話

その日の放課後、卓也は担任の高橋に呼び止められた。

「上杉、このあと視聴覚教室で待っていてくれ」

「何のようですか？」

「後で話すから」

「わかりました」

担任の言葉を怪訝に思いながらも、卓也は言われたとおり視聴覚教室に行った。教室にはすでに二人の生徒が待っていた。

卓也は後ろのほうの席に座り、高橋を待った。

先に来ていた二人とは同じクラスであったが卓也はあまり知らなかった。

だから話し掛ける気にはらなかったが、二人はこちらを見ながらひそひそと話している。

それが卓也は気に食わなかった。

その内に日も傾いてきて夕日が室内をオレンジ色に染めた。

卓也もそろそろ痺れを切らしていた。その時、教室のドアを開け高橋が来た。

「すまん、遅れて」

高橋はそのまま教壇に立ち、話し始めた。

「集まってもらった理由がわかるか？」

卓也は心当たりもなく、黙っていると高橋は話を続けた。

「集まってもらったのは佐伯の自殺のことについてなんだ」

卓也は動揺した。

もう担任まで話がいつてるのかと思った。他の二人も明らかに動揺していた。

「先生、俺たちとそのことがどういう関係があるんですか？」

卓也は高橋に詰め寄った。しかし、高橋はなだめるように言った。

「言いにくいことなんだが、お前たちが佐伯のあとを追おうとしていると聞いたんだ」

卓也も他の二人もそれを否定しなかった。

高橋はさらに三人に、

「お願いだ。そんなことはしないでくれ。馬鹿なこと考えないでくれ」

と言った。

すると今まで黙っていた二人のうち一人が口を開いた。

「もう遅いんです。約束したんですから。もうそろそろ迎えにくると思います」

卓也は何を言っているのかわからなかった。

約束って何のことだ？ 迎えにくるって？ 考えているうちに嫌な答えに辿り着いた。

あの佐伯の遺書：あれは、俺に当てたものじゃなかったのか？ この二人にあてたものだったのか？ 卓也は急に自分が醒めていくのを感じた。

風が変わった。

いやな空気が窓からはいつてくる。その窓のほうを指して二人が言った。

「ほら、来た」

卓也は窓のほうを見た。

そこには何かが立っていた。

それは卓也もみたことあるものだった。

いや人というべきか。

佐伯静江がそこにいた。卓也の頭は混乱した。俺は幽霊をみてるのか？

佐伯への、死への憧れなどもうそこにはなかった。

佐伯は手招きをしている。

それに導かれるように二人は窓のほうに寄っていく。

それを制止しようとする高橋。

やがて制止を振り切り、二人が視界から消えた。

卓也の目にはすべての光景が映画のように映っていた。

現実とは思えなかった。

いや、思いたくなかった。

目の前で二人の人間が死んだ。

そのことについては何の感情も沸かなかった。

ただ虚無が広がるばかりだった。

しかし、すぐに恐怖が芽生えてきた。

佐伯がまだそこにいた。まるで卓也を呼んでいるかのように。

「来るなー！」

卓也は叫んで教室を飛び出した。

第5話

教室をでた卓也はいそいで家に帰った。

そのまま自分の部屋に入り、ベッドに縮こまる。

学校での光景が頭から離れない。

二人の人間が飛び降りる。

そして佐伯の幽霊…気持ち悪いものがこびりついている感じがする。

俺が見たのはなんだったんだ？いくら自問しても答えでない。

卓也はただ震えるしかなかった。しばらくすると、

「卓也、なんかやったのあんた？高橋先生から電話よ」

高橋からの電話の内容は卓也にとってわかってはいたが衝撃的なものだった。

佐伯静江と他の飛び降りた二人は自殺しようと思っていたこと、佐伯の遺書は二人にあてたもの、そして、

「上杉、お前あそこで何をみたんだ？」

「先生みえなかったんですか！？佐伯の幽霊が？」

それは卓也にしか見えていなかった。

いやあの教室で見えなかったのは高橋一人。

それならば…卓也はカーテンの隙間から外を見た。

それは確実にいた。

自分に共感した卓也を導くかのように…。

卓也は恐怖した。

このままでは自分の番だ。

部屋に戻り鍵を締める。

ベッドでカタカタ震えていた。

必死にどうすればいいか考えた。

しかし、それはもう目の前まで来ていた。

意に反して優しく微笑む佐伯。

卓也の恐怖心は次第に薄れていった。

憧れを抱いていた気持ちの奥から沸き上がってきた。

「行きましょう…」

「…ああ」

卓也は導かれるままに窓の外に出た。

「これで退屈な日常から解放されるー」『続いてのニュースです。今日夕方飛び降り自殺とみられる…』

「最近多いよね、この手のニュース」

第5話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。気付いた点や批評してくれたら幸いです。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0148a/>

自殺学級

2010年10月9日23時22分発行